

# 女たちの明治維新

第一回

## 天璋院（篤姫）

画：chinatsu

文：東川 隆太郎

鹿児島生まれ。NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事。地域資源、鹿児島県内の歴史を機軸とした、鹿児島・九州の魅力を観光・教育・まちづくりに展開させる活動に従事。



夏目漱石の小説「吾輩は猫である」は、時代を越えて読まれる名著である。ただ、そのなかに天璋院が登場することはあまり知られていない。主人公の「吾輩」に対抗する猫が、自分がいかに高貴な育ちであるかということ为天璋院をからめてつらつら述べるくだりが登場箇所である。それは明治の東京における天璋院の評価が、依然高いものであったことを裏付けているといえる。

### 徳川家からの縁談と

#### 二年での落飾

天璋院は、天保六（一八三五）年、今和泉島津家の島津忠剛の娘、於一として、鹿児島城下に生まれた薩摩おごじよである。十三代將軍徳川家定の夫人に関する打診が徳川家から島津家にあつたことを受け、嘉永六（一八五三）年、於一は藩主島津斉彬の実子・篤姫となった。さらに公家である近衛家の養女となり、安政

三（一八五六）年に御台所となるべく江戸城に入る。ここまではまさにシンドレラ物語のようだが、安政五（一八五八）年には夫・家定と養父・斉彬とが相次いで死去。篤姫は落飾して天璋院と号する。ちなみに家定の墓は徳川家の菩提寺である寛永寺にあり、天璋院の墓も並んでいる。

傍らにそれぞれが好きだったとされるカキの木（家定）、ピワの木（天璋院）が植えられている。

### 薩摩の土風をもって

#### 徳川家の存続に尽くす

その後、薩摩藩は討幕の姿勢を強め、慶応四（一八六八）年、軍事的対立である戊辰戦争に発展。江戸城に留まった天璋院は、討幕軍の隊長宛てに、「（私の）一命にかけ」と、徳川家存続を請う直筆の嘆願書を出す。これは東征軍参謀こと西郷隆盛に宛てたものとも推測できよう。その結果、江戸城無血開城と徳川家存続

※1 將軍家へ嫁する者としての体裁を整えるため、斉彬は篤姫を実子として届け出た。

※2 高貴な人が髪を剃り落として仏門に入ること。

輿入れの際、鹿児島風景を描いた  
掛け軸を持参し、壮麗な駕籠に乗って  
江戸城入りしたといわれる。



## 天璋院(篤姫) 略歴



尚古集成館 蔵

### ▶天保6年

今和泉島津家島津忠剛の長女として生まれる。

### ▶嘉永6年

島津斉彬の実子となる。  
江戸・芝の薩摩藩邸に。

### ▶安政3年

11月1日江戸城に入る。  
12月18日徳川家定と婚礼。

### ▶安政5年

夫・家定死去。養父・島津斉彬死去。  
落飾して天璋院と号す。

### ▶明治元年

討幕軍隊長へ嘆願書を届けさせる。  
江戸城開城。

### ▶明治16年

千駄ヶ谷徳川邸で死去。享年49歳。  
東京上野・寛永寺に埋葬される。

## 近年ようやくの 鹿児島への里帰り

近年、天璋院を全国区の偉人として  
印象づけたのは平成二十年の大

という天璋院の望んだ方向に進む  
ことになる。  
江戸城を出た後は、明治十六(一  
八八三)年に千駄ヶ谷屋敷で亡くな  
るまで、徳川宗家を相続した田安亀  
之助(徳川家達)の養育に専念した。  
天璋院はまさに幕末明治維新の  
真ん中で生き抜いた女性である。家  
を守る女性の範ともされ、実家に舞  
い戻ることなく徳川家存続に心を  
砕いた人生が、冒頭述べたように将  
軍のお膝元たる江戸こと東京の  
人々からも慕われたのであろう。

河ドラマ「篤姫」の放映であり、鹿児  
島県民もその事績を改めて紐解く  
機会となったことは記憶に新しい。  
天璋院の所持品と伝わるものの中  
に、薩摩切子や薩摩焼、桜島を描  
いた絵などの鹿児島をしのべるもの  
が多々あったと知るにつけ、現在な  
らば天璋院の帰還も一度くらいは、  
と想像するが、実際には生まれ故郷  
である鹿児島を再び踏むこと  
はなかった。ただ近年、嫁入り前に一  
時期を過ごした鶴丸城(現・県歴史  
資料センター黎明館)に銅像として  
戻ってきた。また、ゆかりの地・指宿  
市今和泉の海岸にも於一の銅像が完  
成した。  
天璋院の目に、今の鹿児島はどの  
ように映るのだろうか。